
赤い小人

イラル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い小人

【Nコード】

N4217F

【作者名】

イラル

【あらすじ】

ある日、突如として現れたのは赤い服を着た、小さな小さな男子。身の丈は指くらの大きさで、それが小人だと誰が見てもわかる。彼はゆうとに願いごとを三つするように言うが……。

赤い小人（１）

丸い顔につぶらな瞳。

長めの耳に全身一色の服を纏っている。

被っている煙突帽子は、服と同じ色で先がへによりと曲がっている。

また、二頭身か三頭身の体で動き回る彼等。

背の丈は人の指の長さに満つるか満たないか。

人の前に現れるのは極わずか。彼等を人は小人と呼ぶ。

また、全身の服の色は彼等の仮の名を表している。赤なら『あか』、白なら『しろ』である。

本当の名前は彼等自身しか知らない。知ってはいけない。

彼等ともう二度と会えなくなりたくなければ……。

まっさか、こんなんがいるなんて思ってた。

ひょこんと俺の部屋に置いてある机の上にいるのは小さな赤い物体。

始め、それを俺は虫かと思った。だって動いてるしっ、小さいしっ。

だけど、先がへによりと曲がった帽子から覗くその顔は、人に近い。

俺のメルヘン知識に寄ればこんな形してるのは小人か妖精。けど、羽根はないから小人に決定か？

どちらにしろ、俺の頭がおかしくなってるのは確かなことなわけ。

寝るかな。マジで。

「あか！」

踵を返して寢室へ向かおうとした矢先、声がした。聞きなれない声。

振り返ると、ピンク色の物体が俺の視界に加わった。

「仕事は終わったのか？ もも」

ピンク色に抱きつかれた赤いのが言った。ように見えた。そうか、幻影だけでなく幻聴まで……。

「俺は今、自分がわけわかんねえ」

俺は独り言をぼつり。

バツと目の前の奴らが俺を見た。視線が交差する。びっくりして思わず一歩後ろへ下がった。未だに視線が外れない。

「……見えて……る？」

赤いのが目を見開いてポツリと呟いた。俺は眉を潜めた。

見えてます。見えてますともっ！

「……おい、あんた。もしかして、さんば ゆうと。って言うんじやないのか？」

「はっ？ 何でお前が俺の名前知ってんだよ！！？」

驚ろきのあまり思わず聞き返してしまった。

確かに俺の名前は山波 勇徒だが。

なんでこいつが知ってるんだ？ 俺はこんな奴に会ったことはない。

「やっぱり……はぁ」

なんでか赤いのはため息をつく。

それを見ると怒りが込み上げてきた。知らない生意気なちびや、非現実の最中に置かれた俺の方がため息をつきたいっつのっ！

「えー？ じゃあ、やっぱり見えてるのね！？」

ピンク色の方が叫ぶ。

もう見なかったことにする。って方法は諦めて、俺は返事をした。

「見えてるよ。見えてる」

こうなったら現実を突き詰めてやる！ 俺の頭がおかしいのか、それともコイツらが本当に存在しているのかをっ。

「で、お前等何なわけ？ 俺の幻覚。ってわけではなさそうだけど」

「僕等は小人。普段、君達には決して見えない存在」

「はっ？ 今まさしく見えてるじゃねえか」

赤い小人が一句一句説明する。まるで説明書の箇条書きでも読んでいるかのような言葉を。

だが、その言葉には明らかな矛盾がある。見えない存在なのに今はつきりくつきりと、俺に見えてることだ。

「それは、貴方がアカの運命の人だからよ！」

「運命の……ひとお？」

俺の質問にはピンク色が答えた。じれったそうに足踏みをしながら。しかし、発言は赤いのよりも意味不明。

思わず疑いの眼差しを向けると、頬を膨らませて対抗してくる。

「はは、運命の人なんて大げさだよ。もも。僕等小人には、世界でたった一人だけ自分を見ることが出来る人間がいる。という話なだけだろ」

「そんなことないわ！一人よ！たったの一人！これが運命の人でなくて何だって言うのかしら？」

二人の掛け合いを傍観する。

うつとりと頬を上気させ、一人事のように呟くピンクいの。

アカいのの説明も分かりにくいだが、ピンクいのの説明にすらなっていない。と心底思った。

とりあえずわかったことはある。それはアカいのが見える唯一の人間が俺であること。即ち、俺以外にはこいつが見えないってことだ。

後は……。

「じゃあ、ピンクいのは何なんだ？思いつきり見えてるんだけどよ。」

一人の人間につき一人の小人なら、俺には赤いのしか見えないは

ずだ。なのにピンクいのが見えてるってのは話が噛み合っていない。
もっと簡単にわかりやすく説明してほしいものだ。

「それは、私とアカが恋人同士だからよ！」

ズビシツと人指し指を立てポーズをとる三頭身ちびっこのピンク
……。

そんな宣言しても俺はいつこうに構わないが、その恋人やらが後ろで苦い顔してるぞ、をい。

「もものことはほつといて。実は、僕に関わった小人は見えるようになるんだ。」

「ああ、なるほど。思いつきり抱きついてたもんな。」

しみじみと納得。

俺の言葉に赤いのが絶句して、更に顔全体まで紅くしている。まさに紅葉のような赤さ。全体が服含め真っ赤だ。

ピンクは横でいやん。などと言いながら恥ずかしがっているが、赤いの程ではない。

口をパクパクと動かすが、声が出ていない赤いの方を見た方が楽しいと言っもんだ。

「……そ、そんなことより。ゆうと。あんたにお願いがある。」

とつさにコホンと咳払い一つし、自分に戻る赤いの。俺を呼び捨てにして、更に話をずらす。

まあ、いいか。そこまで人をおちよくる趣味はない。あっさりと話に乗ってやるか。

「願い事？」

「僕に願い事を3つして欲しい。」

案外にお約束なもんだ。願い事を3つだなんて。しかし、なんでまたそんなことを……。

俺の顔が物語ったらしく、ももが口を開いた。

「何故かって？ 3つ願い事を叶えたら、願い事を言った人に一回だけ魔法を使っても良いことになってるの。普通は人に使っちゃいけないんだけど。」

「ふーん。その魔法とやらを使ってどうする気だ？」

俺の問いにアカの目付きがガラリと変わる。小刻に瞳が動き、動揺が見てとれた。

いつまでも口を開こうとしないアカに代わり、ピンクが説明する。

「そんなの簡単な話よ。貴方の記憶を消すの。私達と出会った記憶をね！」

「ふーん。」

少し驚きはしたが、利害が一致したことがわかった。俺だってこんな奴らなんぞ見なかったことにしたい。奴らにしても、俺に見られなかったことにしたいらしい。

「ふーん。って何も思わないのか！？ 自分に魔法を使われるんだぞ！」

アカがびつくりしたように目を見開き、叫びに近い声をあげる。

「別に。忘れさせてくれるなら願ったりだ。その条件、飲んでやるよ。」

肩を一たんすくめ、眉を上げて見せる。どうってことない。と示すために。

アカは『そうか。』と呟いて俺から顔を反らした。何を考えてることやら。

赤い小人（2）

俺達は自己紹介を終え、願い事を何にするか相談することにした。

「ゆうと。僕のことは“あか”彼女のことは“もも”と呼んでくれ。さ、願い事を早く」

すぐに急かすあか。

ちなみに、あかとももは単に担当する場所が同じだけらしい。先ほどあかが必死に弁解していた。他にも黄や緑がいたりとかなんとか。別に興味ないんで流して聞いてたが。

「待つてよ、あか。願い事の定義を説明しなきゃ、ゆうとさんも考えられないわよ」

ももが焦って手をパタパタと振りながら、頬を膨らませた。女、子供がここにいたら可愛いとでも叫んでいたことだろう。

しかも、あかと違ってちゃんと敬称をつけている。まあ、爆弾発言が目立ちすぎるが……。

「定義ってことは何でも叶えられるわけじゃねえ。ってことだな？」

「そりゃあ、そうだよ。何でも叶えられる程、僕達は力を持っていないんだから」

俺の問いにあかはむすつとしたまま答えた。

態度悪いな、こいつ。

「そんな説明じゃ、わかるものもわかんねえだろ」

片手であかを掴み、自分の目線まで持ち上げる。

俺とあかの視線が交差した。しばらく睨みあっているとあかが突如へなりと萎れる。

「お、おい？」

慌てて声をかけた。

いったいどうしたって言うんだ？さっきから、こいつの行動は意味不明だ。

もしかして、強く握り過ぎたか？

そう思うと、いつまでも握って持ち上げているのは可哀想だと感じ、ゆっくりとあかを降ろしてやる。

「ごめん。八つ当たりしてた。」

降ろされてもへによりと頭を下げたまま、か細い声であかはポツリと言う。それは、妙に弱々しかった。

八つ当たりと言われて腹が立ったが、かなりへこたれてるあかをみると、どうにも怒る気にはなれなかった。

「あか……」

ももがあかに駆け寄る。眉を潜めて心配そうに彼を見ている。心

中察するわ。とでも言うような顔。

どうやらももは八つ当たりの原因に心当たりがあるようだ。

「八つ当たりって……何で？」

「それは……」

あかが口ごもる。

俺は思わず溜め息をついた。

聞かなきゃ答えないだろうとは思ったが、聞いても答えてくれそうにないようだ。

ももと目が合う。

「他の仲間が死んだから」

ももの言葉にあかがびくりと身を震わせた。

俺も流石に一步退く。

ももの目は真剣だったし、あかの反応が嘘でないことを物語っている。

俺達が黙っているのを目で確認し、ももは言葉を続けた。

「見える人が殺したの。その子の運命の人も貴方みたいに、魔法へとも思わない。魔法をただの便利な道具と思って」

「やめろ！ もも！！」

ももの話を妨げたのはあかの怒鳴り声だった。

ももが目を見開いてあかを見、顔を落とした。

「ゆうと。願い事は、物だけだ。物を出したり無くしたりするだけ。量もそこまで大量の物は駄目だ。それと、僕のことは絶対『あか』と呼んでくれ。」

そう念を押してあかはももを掴んで机から飛び下りた。

「お、おい？」

「用がある時は名前を呼んでくれ。どうせ、そんなすぐには願い事は決まらないだろ。」

机の陰から聞こえる声。見えないことが、小人の存在を否定していく。

夢なんじゃないか。そう思えてきた。

するりと視界に戻ってきたのはピンク色。

俺はしゃがんで、彼女の様子が見える所まで近付いた。

「ゆうとさん、ごめんなさい。あかは普段とっても優しいんです。

あんな風に怒るのも仲間

間を思つてのことです……」

「わかつてる」

必死に弁解するもにも、何故かそんな言葉が口をついて出た。

よくわからないが、なんとなくあいつの気持ちはわかる気がする。

本当にわかっている

かと聞かれたら答えられないが。

「そう……ですよね。ゆうとさん、ですものね！」

ももはにつこりと笑って頷いた。上げた顔は、何か納得しているらしく、すっきりとしている。

「ゆうとさん。魔法の定義をお教えしますね。」

「あ、ああ。」

願い事が……俺の記憶を無くせ。って言えば全て済みそんな気がするんだけどな。

「まず、私達小人は人間への小さなお手伝い。それをするのが仕事です。」

「ああ、いつの間にか縫い物ができてたり、ケーキが出てきたり。とかだろ？」

昔昔のお話を思い出しながら言った。昔だったら、こんな小人に合えば大はしゃぎしただろうに。

今の俺はそう容易く信じることも、喜ぶこともできやしない。なんだか胸を掴まれたような切ない気持ちになってしまった。

「はい、やったかな？　と思って小人がいるなんて気付かない程度のことです。それが私達ができる範囲なんです」

ももの声は落ち着いていて優しい。それにつられて俺の胸の痛み

が薄れて行く。

「思ったんだけどさ、人の記憶を忘れさすこともできるんだろ？」

気持ちが幾分軽くなったせいか、頭の回転もよくなった。

あかとの約束を思い出したんだ。『三つ願い事を叶えたら、記憶を消させて欲しい』それなら、記憶操作はできるはずだ。

ももは頭を下げて、首を横に振った。そして、振りながら俺を見上げて、また顔を落とす。

「禁止されてる魔法なの。命の危険に晒された時だけ使っていい禁断の魔法。だから、願い事として使うことはできないんです。」

「……ちょっと待てよ。じゃあ、俺に見付かったことはあかにとつて、命の危険に晒されるってことか？」

別に俺はあかに害をなすことはないぞ。と続ける前に、ももが口を開いた。

「言っただでしょ？ 仲間が死んだって。運命の人に殺されたって。」

ひどく冷たい印象を受けた。伏せめがちな目と、その視線が。事実、ももだってあか動揺にショックを受けてるだろうし、怒っているのだろう。

それが表に出たとすれば納得が行く。

「……そついう目で見るなよ。」

「う、ごめんなさい！」

慌てて冷たい表情から元の表情に戻るも。更に手を口に当てて、耳を赤くしながら俺の様子を伺っている。

「いや、いいんだけどさ。……答えたくないなら答えなくてもいいんだけどよ。その死んだ小人ってーのは、どうやって死んだんだよ？」

「ゆうとさんって、本当あかに似てる……」

くすりと笑うもに、思わず『どこがだ。』と突っ込んでしまう。あかと俺が似てる？ 何を馬鹿なことを。

「ふふ……死んだのは、とあることを知られたからです。私達はそれを知られたら死んでしまうの。」

「とあること？」

どこか遠くを見るももの目から涙が一つ。それをすぐに拭うと俺にウィンク一つ飛ばして

「それを言ったら、気になって調べたくなるでしょ？ じゃあ、ゆうとさん。何かあったら呼んでくださいね！」

元氣良く暗闇へと消えていった。

いや、十分に気になるんだがな。をい。

……仕方ない。とりあえずは一つ目の願い事でも考えるかな。

赤い小人(3)

あの夢から一ヶ月。

何事もなく過ぎていく日常。いやあ、素晴らしい。

「いい加減、願い事をしろーっ！」

カーンという音と俺の頭への衝撃。視界が壁から床へと変化する。ころころと床を転がってきたのは、小さな空き缶。それが頭の後頭部に当たったのは言うまでもない。

つか、真面目に痛い。じんじんと痛む頭を押さえながら声の主をにらみつける。

「あんた、この一ヶ月何度言ったら願い事すんだよ！！？ 現実逃避してんじゃねえよ！！！」

きゃんきゃんと子犬のごとく吠えるちっこい赤い奴。

弱い犬ほどよく吠える。じゃなくて、問題は俺の頭が何故痛いか……。

「てめえ。人様に缶を投げるんじゃない！！！」

「うわ！ 痛いっつーの、このアホ！！！」

煩いそれを片手で掴みあげて握りしめる。するとそれは案の定、更にわめいて手をばたつかせた。

「うふふ。日常って素晴らしいわ」

『これを日常に入れるな!!』

先ほどまであかがいた横のところにももは腰かけて、うつとりとした目でこちらを見ていた。

ももの発言にあかと俺の声がハモった。嫌そうな顔のあかと目が合う。まあ、俺も同じような顔してるだろうけどな。

「そんなこと言って。最近ずっとその繰り返しじゃないよ」

『うつ』

ももの言葉が心臓をぐさりとえぐる。そんなもってまたもやあかと台詞が被り、またも視線を見合わせてしまう。わかってる。この繰り返しだってことぐらい。

「ゆうつがとつと願いをすればいいのさ!」

掴んでる手の力が抜けてたせいか、元氣良く吠えているあかをぎゅつと握り、溜め息をついた。

「はあ、かと言ってな。このご世代、ありとあらゆるものがあるんだよ。別に今、何か欲しい物なんかないんだってば」

ちなみによく願い事で話しに出てくる富や名声、地位なんかは既に却下され済みである。

「寒い時期だしマフラーなんてどう?」

俺の腕の中でぐったりしているあかに代わって、ももが提案する。

「あの子、そんな毎年使うもん。腐るほどあるっつーの」

本当にもう、こいつらの叶えられる願い事つつたら、普通どこの家庭にでもあるものばかり……。

「じゃあ、セーター」

「ある」

言いかけたももの言葉を遮る。

「あ、そうだ！アレなんてどうだ？」

いつの間にか復活したあかが手をポンと叩く。
どうやら何かを思い付いたらしい。

「なにになに？」

ももが促しの言葉をかける。

視線があかへと注がれた。

あかは自信満々と言ったように笑みを溢し

「サンタへプレゼント頼むための靴下！」

ベシッ！

思わず俺は手に持っていたそれを床に向かって放り投げた。いや、投げ捨てた。

あっけなく床に衝突して伸びてる馬鹿。

「あーあ、あか真剣なのに。」

「なお悪い！ サンタなんて信じる年じゃないっつーの！」

激しく怒鳴ると、ももは肩をすくめ膨れっ面を俺に向けてきた。

「サンタは本当にいるのよ？ それに、小人の出した靴下には絶対にプレゼントを入れてくれるんだから。」

まあ、小人もいるくらいですから、百歩譲ってサンタもいることにしよう。

だがっ

「プレゼントなんて子供騙しの玩具か菓子だろ」

「うつ……ゆうとさん、夢がないなあ。そりゃ、お菓子だけど、とっても美味しいのよ？」

「夢がなくて結構。俺はシビアに生きる。」

そんな。とももが文句を垂れるが知ったことではない。

まあ、彼女等に見れば夢の住人の小人なわけで、夢を否定されるのは嫌だろうが。

「とっても美味しいチョコレートなのに……あ、そうだ！ ゆうとさん、お菓子好き？」

ぶつぶつと文句を垂れてたかと思うと、今度は目を輝かせているもも。こいつ、百面相できるんじゃないだろうか……。

「菓子？……嫌いじゃないが」

「やった！あのね、あのね、あかが作るハチミツクッキーがすごく美味しいの！」

更に輝いた目で身を乗り出し、俺に視線を送る彼女の思考は手にとるようにわかる。

だからと言ってそうやすやすと欲求を飲む俺ではない。

「で、食いたいつてか？」

「うん！食べたい！！」

欲求を飲む俺ではない。はずだが、いかんせんももには何故か弱い。

まあ、笑顔で女の子に懇願されれば普通はな。小さい小人だけとさ。だけど、小人の中ではそここの美人だとあかが言ってたし。よしとするか。

内心、意味の分からない屁理屈を立てながら、仕方なくしゃがんであかを見る。

あかは、まだ床に突っ伏したまま……。

「おい、あか。起きろ。一つ目の願いが決まったぞ」

「ふん。ももになんか鼻の下伸ばしてさ。それでお願いごとが決まった？ デレデレしすぎじゃんか」

顔を上げて話し出したかと思いきや、こいつっ。

相当俺と喧嘩したいらしい。悪いが、売られた喧嘩は買うぞ！？

「あかつたら、焼きもちやいて可愛いー！」

勢い勇んで腕捲りをしていたのだが、黄色い声に体勢を崩す。
もちろん声の主はももに他ならない。だが、それはあかには逆効
果だろ……。

「自信過剰もいい加減にしろよ！」

ほら、カツと赤くなつて怒鳴る。

しかし、あかは一瞬にして身を震わせたじろいだ。
ももの目がうるんだのだ。やはりあかも、ももには弱い。
こういつのを見てると、確に俺とあかは似た者同士かもしれない。
と思わされるな。嫌だけど。

「ね、願い事を叶えないとは言つてないだろっ。」

早口でまくしたてるあかの姿を見ると、思うことがある。

俺の前でいちゃついてんじゃねえ。

俺の内心を知ってかしらさ。いや、知らないであろうつま茶番
劇は続く。

「でも、あか嫌そうな顔してた……」

ついに彼女の目から涙が溢れでる。びくりと身を震わせたのはあ
かだけではない。俺もだ。

「え、いや。その……」

慌てて弁解できないあか。んなもんだから、ももが顔を落とす。

仕方ないな。まったく。

赤い小人（4）

「うわっ!？」

「きゃっ!」

思わぬ行動に悲鳴をあげたあかともも。まあ、いきなり捕まれて肩に乗つけられてるんだから当たり前か。

二人はきよとした目で俺を見つめた。わけがわからない。そう言ってるようだ。

「クッキー作るんだろ？」

口の端をあげてやると、ももの目が涙目とは違った輝きをともし。そして、元気良く頷いた。

「うん!」

「……ふう」

ももの機嫌が直ったことに、安堵の溜め息をつくあかだった。それを見ると、どうも笑いが込み上げて来てしかたがない。

とりあえずはキッチンに移動。そんな広いキッチンではないが、まあ俺と小人が動く分には十分だ。

「って、本当に作るんじゃないかって魔法でぱつと出す。のか？」

そついや魔法使えるわけだから、よく考えればそうだな。あかが俺の台詞に目をキラリと光らせた。

「魔法より、作った方が美味しいよ。だいたい小人は魔法より作る方が得意なんだ」

胸を張って言い放つ様は自信満々。これは多少期待してもいいかもしれない。

あかは、軽々と俺の肩から飛び降りるとキッチンの上へと着地した。

「さーて、小麦粉、卵にバター。んでもって少量の牛乳！」

歌うかのように陽気に材料の名前を出し、指を指して行く。
するとどうだろう、何もなかった場所に、次々と言った材料が出てきたじゃないか。

袋ごと出てきた小麦粉を筆頭に、ボールの中に入った数個の卵、皿に置いてあるバターに、カップに入った牛乳。更に、菓子作りに欠かせない泡立て器や皿も出てきた。

「さーて、作るぞ。もも、運ぶの手伝って」

「うん！」

腕捲りをし、舌で唇を濡らす様は楽しそう。そんなあかが、勢いよく小麦粉に手をかけた。

反対側にはももがスタンバイ。

ズシャ

勢い良く持ち上げたかと思ったら、小麦粉があっさり崩れる。袋の中からドサドサと白い粉が飛び出てきた。

それと、プチ。そんな潰れるような音もおそらく出ただろう。

『せーの』という掛け声と共に、あかは袋の影に。いうなれば下敷になったのだ。

重かったのか、反対側にいたものの力が強かったのか、はたまた転んだのか。理由はわからないが、間抜けな光景だ。

しばらくどうなるかと様子を伺ってみる。しかし、ももが慌てるだけで他は何も変わらない。

ももが、なんとか袋を持ち上げようと試みる。しかし、粉が出るだけで袋を動かせそうにない。諦めたのか、しまいにはおろおろしながら俺を見上げる始末。

「はあ」

ため息一つ。片手で倒れている袋を持ち上げて立たす。その際今までより多くの粉が溢れたが気にしない。例えそれで、あかが赤と呼べない白い色になったとしても、気にしない。

あかは案の定、蛙のごとく倒れていた。しかし、直ぐ様起き上がり身を震わせた。

「魔法でも使って運ばいいだろ？」

あかが礼の言葉をいいながら服を叩いているのを横目で見、文句を突き付けた。

その言葉にあかは困ったように苦笑い。

「小人は魔法が苦手。更に言うなら、自分の得意とする魔法以外はからつきし駄目なんだ」

「あかは物を出す魔法しか使えないの。重い物を運ぶのはきーの役目なの。きーっていうのは黄色の色の小人よ」

あかとももは説明しながら小麦粉を見上げた。運ぶ方法を考えているようだ。

「なら、その黄色に頼めば？」

「駄目。本来の仕事の方に皆行ってるから。あか、ボールを側に持ってきて、袋を倒してみようよ」

質問にあっさりと否定の意を示すのはもも。

あかはおもに言われた通り卵が入ったボールをえっちらおっちら押している。

……亀の歩みのごとき鈍さ。これじゃあ、いつまでかかるかわかったもんじゃない。

仕方なしに小麦粉を片手に持ち、もう一方の手でボールを近くまで寄せた。

「なんだよ、ゆうと」

押すものが突如なくなり、すっころんだあかが、顔を押さえながら不思議そうに問いかけてくる。

「手伝ってやるから指示よこしな」

「……あ、ありがとう」

驚きの表情が、あかの顔に貼りついている。

わからんでもない。俺だって正直な話、内心驚いている。生意気で非現実的、できれば関わりたくないと思ってた連中に、あっさりと手を貸している今の状況に。

別に仲良くしようなんて今でさえ思っていないわけで……ただ、手を貸すくらいなら良いかと思っただけで。いや、こいつらに任せたら日が暮れると思ったから手伝うんだ。ああ、絶対にそうだ。悩んだすえ、答えを出している俺を知るよしもなく、あかは作り方を指示していく。

できたのは丁度三時のおやつの間。

昼前から作り出し、できた数はかなり多い。大皿に溢れんばかりに収納されている。しかもそれが一つ、二つ、三つ、四つ……。

短時間でこんなにたくさん出来上がったのは、焼く時間がほとんどかからなかったせいだ。それはなぜか。ももが言うには時間を短縮できる魔法を持った仲間が助けに来たらしい。

あいにく、あかは作るのに一生懸命で、その仲間と話たりしなかった。だから、俺にはその仲間が見えなかったわけで。

クッキーが、すぐに焼き上がるのが見えただけ……。ちよつと気味が悪かったが、小人が普段は見えないということがよくわかった。ちなみに、今も透明人間がごとく、その小人が食べているクッキーが何もない空間に消えていつているように見える。

「ああ、ゆうとは僕の見える人なんだ」

あかが何かに答えを返す。すると、今まで見えなかった小人が姿を表した。

黒色で帽子を深く被っており、目が見えない。

「へえ。じゃあ、これがあかの……」

目を出すことなく俺を見上げる黒いの。見えてるんだろうか……。

「んー！ 美味しいー！」

「うん。まずまずの合格点だ」

ばくばくと、次から次へ頬張っていたももの声があがった。
それにつられてかあかも感想を述べる。可愛くない物言いだ。

「あいな、お前に言われた通りやつただろ？」

「多分、力加減の頃合いのせい。」

俺があかの口にクッキーを多量に押し込むのを無視し、黒いのが
ぼつり。

「もがむ！」

黒いのの言葉に気を取られたら、あかが俺の口の中にクッキーを
敷き詰める。魔法だろうな。誰かに目配せしたのが見えた。

出来立ては熱い。マジで。もちろん俺はむかついたので、あかを
クッキーの山に押し込める。

「ぶ、あははは。あかとゆうとさん、何やってるの？ふふ。」

ももは笑って、黒いのはもくもくと食べ、俺とあかは火花を散ら
してファイティング。

賑やかで煩いが、つまらなくはない。気持をぶつける相手がいる
のは案外……。

まっ、たまにはこんなおやつ時間を過ごすのも悪くはないかもし
れない。なんて、柄にもなく思ったりする。

赤い小人（5）

見事に皿の上の物がなくなり、山になった腹を上にしながら寝る小人達。

よくあんな小さな体にこんだけのものが入ったな。となかば関心する。

一気に静かになった場所で、俺は椅子に背を預けて天井を仰いだ。自然に頭の中は考えがあちらこちらに行き交う。

今やっと一つ目の願いごとを叶えたわけだ。まあ、大した願いごとでもないが。寧ろ俺が作ったんだから願いごとが叶えられたというのはおかしい気もする。けど、どうせ初めから期待などしてないわけで、文句を言うつもりはないけどな。

「残り後二つ……か」

小さな独り言。ちらりとあか達を見たが、彼等が起きる様子はない。

二つ目の願いごと。きつと起きたらすぐに、あかはその話を切り出すにちがいない。一つ目の願いごとの時も何度かせかされたし。問題は、俺が何も願いごとを考えてないってことだな。だってこいつらが叶えられるのってたかが知れてるし。

「魔法は苦手。菓子作りが得意。寧ろ家事全般が得意そうだが」

今度は視線をずっとあか達に向けてみる。出会った時から今までの記憶が頭をよぎる。

最初は生意気なガキだったよな。人のこといきなり呼び捨てにするし。

「……そついや、なんでこいつ俺の名前を知ってたんだ？」

ふと、疑問が浮かぶ。一つ疑問が浮かぶと、水に雫を落としたように、次々と不思議なことが浮かび上がってきた。

なぜあかは俺にしか見えない？

運命の人っていうのは実際どういうことなんだ？

なんで俺の記憶を消さないといけないんだ？

なぜ、あかやももといった名前と呼ばせる？

これ以外で呼ぶな。ってことは、本当の名前じゃない。ってことか？

偽名、ハンドルネーム？

どうして俺に見つかったら命の危険にさらされるんだ？

仲間が死んだからか？

じゃあ、どうやって仲間は殺されたんだ？

そついえばももが言ってたな。とあることを知られたら死ぬって

とあることってのはいったい何だ？

「……駄目だ。何一つわかんねえ」

頭を左手で粗く掻いた。

駄目だ。疑問は次から次へと出てくるのに、答えが見付からない。いや、俺が知らないだけだ。

きつとあかなら全て知っている……。

「気になるな……」

様々な疑問は消そうにも消えずに燃え上がる一方で。知りたくて仕方がない。何か方法はないのか？

「……そうだ！」

良いことを思い付いた。

これならあかも答えるしかない！

「よし！あかが起きたらさっそくやってみるか。」

うつつきとする心を押さえながら、俺はあかが起きるのをじっと待つことにした。

あかが起きたのは約一時間後。

まだ眠いらしく欠伸をしながら俺を見ている。

ちなみに黒いのともは既に起きています。黒いのは仕事があるとかで、どっかへ行ったが。

「起きてすぐに悪いんだが、二つ目の願いをいいか？」

目を擦りながら、あかはこくんと縦に首を振る。

俺は右手を開き、それを前に押し出す。

あかとももが俺の手と顔を交互に見た。

「俺の五つの問いに、イエスカノーで答えて欲しい」

要件だけを述べる。

俺が今からしようとしていることを、知られてはいけない。余計なことなんか話してたらいつ口が滑るかわかったもんじゃない。

こいつが願いごとを承諾するまで、怪しまれては駄目だ。

心臓の音がやけに大きく聞こえた。

「そんなことでいいのか？ もつと他に好きな願いごとをすればいいのに」

目を見開いて、不満いっぱい抗議の声。

「んなこと言われても、お前等が叶えられることつつたら、たかがしれてるじゃねえか」

「うっ。そりゃあそうだけど……」

直ぐ様口をついて出た言葉は、あかにダメージを与えたいらしい。

あかが頭を垂れ、うな

だれている。

「あ、いや。菓子とかより、お前等のことを知りたいと思ってよ」

しまった。あんまり深くしゃげてるもんだから、慌て本音をポロリ。

「僕等の？ 小人のことを知りたいのか！？」

「そ、そうだ。小人について知りたいんだ。答えてくれるか？」

俺はほっとした。深い意味までは悟られなかったらしい。

だいたい、あかの目が輝きを放っている。怪しまれていない証拠だ。

ただ、嬉しそうな声には、少々良心にトゲが刺さるが。

「それなら、イエスとノーだけじゃなくてもいいのに」

「いや、答え難いこともあると思うしな。イエスとノーで答えてくれればいい」

あかのことだ。喋りたくないことは、決して喋らないだろう。

しかし、イエスカノーの二択だけなら、自分から喋ることはない。だから、深い部分ま

で踏み入れない可能性が高い。それならば、答える方としては答えを軽く見て、簡単に言うに違いない。

ただし、俺の今回の作戦はイエス、ノーだけで十分。俺が考えていることが、当たりか
はずれかの答えが出ればいい。

「わかったよ。ゆうつ。それじゃあ、五つの質問を僕にしてくれ」

「オーケー」

よし、あかが承諾をした。こっからが勝負だ。

「一つ目の質問だ。お前達は、あかやももの他に本当の名前があるのか？」

「……何でそんなことを聞く？」

あかの顔付きが一気に険しくなる。警戒されてるのがひしひしと伝わってきた。

でもそんなのは予想済み。

「なーに、怖い顔してんだよ？ お前達があかやももって呼べって言っただろ？ 他で呼ぶな。って。だからさ、他に名前があるのかどうか気になったんだよ。イエス？ ノー？ どっちだ？」

なるべく軽い口調で、ふざけたように。探っていると思わせては駄目だ。

あかは、険しい顔を崩さない。しかし、

「イエスだ」

答えた。あかは俺の勝負にノってきたのだ。

よし、俺の勝ちだ。これで、もう隠し通す必要もない。バレたところで、あかは最後まで答えるしか道はないのだ。

一つの問いに答えたのはらば、今後拒むことはできないはずなんだ。何ってたって、これは願い事。願い事は最後まで叶えなければ、願い事ではない。

「んじゃ、二つ目。もしかして、名前はお前達の弱味か？」

「イエス」

俺が真剣になると、あかも声を低くした。真剣差が伝わってくる。心臓の音がいつもより早く聞こえた。

今度の返答は早かったのは、ももが何か言おうとする前にあかが答えたからだ。

先に発言することで、あかはももを制した。口出しすることを、決して許さない。

ももは何かを言おうとして開いた口を仕方なく閉じた。自分は蚊帳の外だと感じたのだろう。黙ったまま俺達を見るだけ。

あかがそんなももの行動を確認し、俺に視線をなげた。それは、早く質問を進めろという合図。

にしても、名前が弱味か……なら教えてくれるわけがないよな。今までのことも納得がいく。

まあいい。気になることは、突き止めればいいことだ。疑問はまだある。なぜ俺があかに見える人のか。

次の質問は一つの賭けだ。ももが何度か俺とあかが似てると言っていたから、たぶんあっていると思うが。

「三つ目。俺とお前に何か共通点があるから、見える人なのか？」

「イエス」

あかが躊躇することなく答える。名前という単語がなかったせいだろう。答えても支障がないと考えているんだ。

答えはイエス。ということは、俺とあかは何かが同じはず。顔、形、性格は明らかに違う。ということは共通点は俺が知らないあかの部分ということだ。

一番確率が高いのは生まれた日。世界で一人だけなのだから、何か特別な共通点のはずだ。

険しい表情は変わっていないあかだが、俺の意図はわからないらしく眉を潜めている。

後質問は二つ。俺は次の質問を口に出した。

「四つ目の質問だ。あか、お前の名前は俺が知ってる名前だろ？」

「っ……」

あかは押し黙った。ようやく俺が考えていることがわかったようだ。

俺の考えていること。それは、あかの本当の名前を知ること。知ったらどうなるのか。

それが気になって仕方がなかった。

この質問にあかが答えればその答えも完成する。

「あか、答えろよ」

「……イエスだ」

低い俺の声に、あかが諦めたように顔を落とし、答えた。

答えは予想通りイエス。

俺が知っている、つまり俺に関わりがあるものの名前。親、兄弟、親戚。

俺に兄弟はいない。と、すると親や親戚。

親や親戚だとしたら、俺に名前がばれる可能性はかなり低くなる。なにせ、予想しなければならない幅がとても広くなるのだから。

それに、親や親戚の名前を知らない人だって、世の中にはいる。

また、俺はあかやもも

に親や親戚の話はしていない。だから、俺が親や親戚の名前を知っているかどうかはわからないはずだ。

だが、彼等は俺が絶対に名前をわかるだろうと予測している。何度も“名前を言うな”

という警告が確固たる証しだ。

他の誰がわからなくても、俺が絶対に知っている名前。それは……。

赤い小人（6）

「最後の質問だ」

「……わかつてる。答えるぞ」

確認するように告げると、あかが頷いて俺を見る。

彼は覚悟を決めていて、もう険しい顔をしていない。感情が読み取れない顔で、真っ直ぐ俺を見つめている。

心臓が今までより早く、早く鳴り響く。音も大きくて。これから、あかの名前を口にするんだ。と思うと、口元が緩む。

合ってたら良いと思う。

本当の名前を呼べたら、近くなるような気がするから。

「あか」

一言づつ区切って言葉をつむぐ。

口から出る言葉を自覚しながらも、なぜか俺は他人が言っているような妙な感覚に捕われていた。

「お前の、名前は、」

口が動く。

お前の名前は、俺と同じ……
同じ名前の

「山波ゆう

「ダメーっ！！！」

とだな？」

ももの勘高い叫び声に、俺の言葉の語尾は掻き消された。

何かと思い、直ぐ様もみに視線が行く。

ぎよっとする。

小刻に震え、口を押さえ、カタンと膝を付くもも。目からはぼろぼろと涙が溢れ出ていた。

何をそんなに怖がっているんだ？

疑問に思ってよく見ると、ももは一点を凝視していた。

彼女の視線を追う。

ももの視線の先には、あかがいた。

ただ、あかの向こうの景色が、うつすらとあかを通して見えた。

彼の体が透き通っているのだ。

「……イエスだよ。僕の名前はあんたと同じ、山波勇徒」

俺と目が合うと、あかは一瞬寂しそうな目をし、最後の質問に答えた。

だが、すぐに口の端を上げ、言葉をつむぐ。

「勝ったと思った？残念だけど、少し考えが足りなかったね。ゆう

と」

「……」

俺は何も言えなかった。

あかの馬鹿にしたような言葉と嘲笑。だけど、それに腹が立つとかはなくて。

何を言っているのか、何が起きているのか、頭の中が真っ白だった。

何も考えられない。

ただ、あかが透けているのがひどく嫌悪感を掻き立てる。胸がぎゅっと締め付けられた。

「どうせ、弱点の名前を知って、僕を脅すつもりだったんだろうけど。そうはいかない」

あかの視線は冷たかった。その視線と、皮肉たっぷりの口調が、俺を軽蔑している。

脅すという言葉に慌てて違つと口を開きかけたが、次のあかの発言に俺の声は出ていくのをやめてしまった。

「名前は確かに弱点だ。なんてたって、名前を呼ばれてしまえば僕達は消えてしまうからね。」

仲間が殺されたの。運命の人に。前にももが言っていた言葉が頭にこだまする。名前を呼ばれたら消えてしまう。

仲間が殺された。

あかは消える。

「……死ぬってことか？」

やっと出たのはあかへの問掛け。彼は俺に頷いてみせた。

「ちょ、ちょっと待てよ！冗談だろ？たかが名前を呼ばれたぐらいで死ぬなんてよ。そんな笑えない冗談っ」

上擦った声が出た。無意識に口調が早くなる。

胸の奥で何かがつつかえて痛い。胃には何か重い物が沈む。そんなの冗談に決まってる。俺が名前を知ろうとしたから、あかともがふざけて俺を

はめようとしてるんだ。そうに違いないっ。

お願いだから、そうであってくれ！

けれど、そんな期待はすぐ打ち砕かれた。ももの言葉で。

「嘘なんかじゃないっ。あかは、あかは消えてしまう！私達小人は、名前を誰にも知られてはいけない！神様との約束よ！！」

ももは大声で叫んだ後、泣き出した。それはあまりにも痛々しい泣き声。喉が枯れるよ

うな叫び声に、大粒の涙。それが止まることを知らぬかのように続いて。

悲しい。

そんな気持ちを訴えてくる。自分の気持ちも、ももの悲しみに引きずり込まれる気がした。

喉に鉛が入ったかのような感覚。出た声は、かすれた。

「……そんな……そんなこと。ってっ！」

その後が続かない。

俺はあかに何て言おうとしてるんだ？

あかはそんな俺を見ながら、笑った。眉を潜めたまま口が笑う。

「悔しそうだな。まあ、僕にしちゃあいい気味。って感じだけど」

肩をすくめるあか。いい気味って……自分が消えるのに？
どうして、そんなことを言うんだ？

弱点を知って、脅すつもりだったんだろうけど。

あの台詞が記憶を通して、もう一度俺の胸に突き刺さった。

「違う……違うんだっ。名前を知りたかったのは、お前の……お前

の本当の名前を知りた
かっただけでっ」

言葉を放つと、堰を切ったように口は止まらなくなる。
だって、俺は本当の名前を知りたかっただけなんだ。

「本当の名前を知れたら、仲良くなれるんじゃないかって。親しく
なれるんじゃないかってっ！」

無意識に声が大きくなる。
深く考えてなかったんだ。
本当に、名前を言ったぐらいでこんなことになるなんて。
こんなことになるなんて、思わなかったんだっ！

「ゆうと……」

あかが俺を呼ぶ。その声はノイズがかかったように聞きづらくな
っていた。

胸が壊れそうだ。痛くて。痛すぎて。
あかがだんだんと消えて行くのがわかる。

俺のせいだ。

そう思った。

俺があかの名前を呼ばなければっ……

「ごめん……」

最後に出たのはその言葉で。あかはやつと聞こえる声で一言

「いいんだ。ゆうとに名前を呼ばれた時、本当は嬉しかったよ。僕が僕だと感じる事ができて。ありがとう」

そう言って消えていった。
何も残さずに。

消えた。

そんな礼なんて言っなよ……消えちまうのに。死んじまうのにっ！

赤い小人（7）

しばらくあかが居た場所を凝視していたが、見ているうちに胸の痛みは更に増して。

思わずやりきれなくなり、突っ伏した。両手で頭を隠し、動くのをやめた。

何も考えたくないのに。

どうして？

その言葉が頭に敷き詰められていく。

苦いものが口の中に広がって、熱いものが一筋、頬を伝う。

「ゆうとさん……」

涙が止まっていけないのだろう。涙声でももが俺の名前を読んだ。

俺は顔があげられなかった。

ももだって俺に何度も忠告してくれていたのに。そう思うと、どんな面を彼女に向ければいいのか……。

「ごめん……俺の、せいだっ……」

まだ喉につつかえる物がある。拳をぎゅっと強く握った。

俺が名前さえ呼ばなければ。

もやもやとした胸の内は苦しいと悲鳴を上げる。手の痛みでその苦しみが消せたらいい

のに。

痛いくらい強く握った拳に、小さな暖かい感触。ももの手が触れたのだと、思った。

「違うよ、ゆうとさん。私達がちゃんと話しておくべきだったの。ゆうとさんなら、わかってくれたのにつ。言わなかった私達がいけないの」

だんだんとか細くなって行くももの声。

「いや、俺が名前なんて呼ばなければ……知ろつとしなければっ！」

俺やももがそんなこと言ったって、あかが戻ってくるわけじゃない。

そんな言葉が頭をよぎると、より胸が張り裂けそうに痛む。

「……ゆうとさん。今までであったこと、全部忘れてください。」

ももが言った。その言葉に、俺は思わず顔を上げた。てつきり泣き顔のももがいると思ったのに、彼女の顔は微笑んでいた。

けれど、目は赤らみ、その微笑みはどこかぎこちない。

「私もあかが消えた今、もうすぐゆうとさんには見えなくなります。だから、いっそ全て忘れてください。夢だと思ってください」

ももは俺に言った。全てを忘れてしまえと。

確かに俺は、夢だと信じこめば夢になるだろうし、この辛さから逃げられる。

「だけど、ももにとっては……。躊躇っているとももは更に俺へと追い討ちをかける。」

「ゆうとさん。何を躊躇っているんですか？あかとの約束が少し早まるだけです。全てなかつたことにする。それを始め、貴方も了承したじゃない。」

「ね？と笑ってみせるもも。俺はももが必死に感情を押し殺しているのがわかった。」

「本当は叫びたいだろう。泣きじゃくって、俺のせいだと言えたら、お前はどれだけ楽になるだろう。」

「でもそれをやらないのは、ももが俺に優しいからだ。俺が傷付いてるって思っ、自分」

「のが傷付いてるのに、気を使って優しくする。」

「それが激しく俺を空しくさせる。」

「確かに最初はこんなこと夢でありたいと思っただけ。ただ、」

「だけど、このままもやあかを放って置くなんて……嫌だ！後味が悪すぎるじゃねえか！！」

「どうにかなんねえのか？どうにか……。」

「そうだ！ちよつと待てよ。まだ、俺は最後の願いをしていない。なら、もしかして……」

「をい、もも！あかは消えちまったが、最後の願い事はまだできるのか？」

「あかの存在は、私がゆうとさんに見えなくなるまで持続します。だから、私が消える前」

「なら、私が責任を持って叶えます！」

ももは言った。最後の願い事を叶えたいと、俺に。そして、願い事はどうやらまだ有効らしい。だが、時間がない。ももがあかのように透け始めてきたのだ。

「なら、あかを生き返らせてくれ！」

単刀直入にももに願った。一番の願い事はこれでしかない。俺の願いに、ももは額に皺を寄せた。かと思うと頭を垂れ、首を横に振った。

できない。

そう彼女は言った。

どうして？

そう質問するまえに彼女は答えた。俺がどこかしらで予想していた答えを。

「駄目です。あかを生き返らせるのは、人間への手伝いでも、些細な願い事でもない。私

達の叶える力では、叶えられない願い事です」

淡々としゃべり、頭をあげるもも。他には？と俺を促す。

叶えられない願い事。

わかってたさ。小人の願い事では、叶えられない願い事だつて。でも、それは単刀直入に言った場合。きっと他に何か方法があるはずだ！

何か。

待てよ……あかは何で消えたんだっけか？

俺が名前を呼んだせいだ。

なら、それを忘れたらどうだ？

時間はなかった。もうももの体を通してあちら側が見える。

俺は、早口でまくしたてた。

「もも、俺があかを呼んだことを忘れたらどうだ？そしたら、呼んだこともなしになるんじゃない？」

これなら、どうだ！と期待に胸を膨らませ、ももをじっと見つめる。

が、ももは、首を横に振ってしまった。

頭に強い衝撃を受ける。これで駄目なら……もう、ももは消えてしまう。

最後の願い事は、叶えられない……？

「駄目。ゆうとさんが忘れても駄目なの。神様と小人の約束を破ったことを、神様は知っているから。」

ももはそれから、さよなら。と言葉を続けた。

直ぐに彼女もまた、俺の前から姿を消していった。

結局、最後の願いは叶えられないまま。

これで、夢であつたと思うこと以外、方法はなくなった。

後味の悪さを残して、彼等は去って行ったのだった。

俺の前から。

赤い小人（8）

あれから、約一ヶ月。

だんだんと記憶が薄れて、過去の夢であつたと思うようになっていた。

ただ、心のどこかでまだ忘れたくないと言っている自分がいるのも確かだ。

だから、毎日あかに教わったクッキーを作る。今日も皿に盛り付け、椅子に腰を下ろした。

窓から見える青い空をぼーとしながら眺めながらあの日を見つめる。

あの後、ももがいなくなつて一人になつた俺は、自然に涙が溢れでて……止まらなかつた。

たっけ。今思うと恥ずかしいが。

でも、泣いた後はすっきりして頭もよく動いたっけ。今更最後の願い事なんて考えてもな。と思いつつ思ったことを口にしてた。

『神様との約束なら、神様とやらの記憶をなくせば……』

なんて。もう一ヶ月も経つのか……。

天気がいいな。

「ゆうつ！　美味くなつたじゃん！」

ふと、過去から現実に戻ると、いきなり空耳が聞こえた。お菓子の方から懐かしい声が出たと思つた。

少しびつくりしたが、なるべく期待せずに菓子に目をやった。
視界に入ってきたのは、赤とピンクの帽子。菓子はなくなっていた。

胸はいけないと思ってでも小踊りをしだす。

「……俺、頭おかしくなったか？」

自分の状況をぼつり。

幻まで見えるなんて。そうとう頭がいかれてるに違いない。

「ち、違うよ。ゆうとさん！ あかが生き返ったの！」

「ゆうとのおかげだ。ありがとう。」

ももとあかが口々に言った。嬉しそうな満面の笑み。思わずつられそうになった。

だが、はつきりと思ったことを言おう。

「何でだ？」

ちなみに両方に聞いている。

結局最後の願いは叶わなかったはずだし、俺はあかを助けることができなかったんだ。

それがなぜ今更になって……幻覚以外に思えるわけがない。

あかとも目は見開いて俺を見る。

「だって、ももから聞いたよ？ あんたが、ももに神様の記憶を消せ
て願ったんだろ？」

「はっ？」

あかの台詞につい聞き返してしまった。

ちよつと待てよ。それを言ったのは、ももが消えて、ひっそり一人で泣いた後。冷えた

頭で考えた時。

ももを横目で見た。俺の視線を感じたのか、慌ててそっぽを向き口笛を吹く。

「……もも。お前、あの場にずっと居やがったな!!?」

ガタンと机を拳で叩いた。あかとももが反動で小さく飛び上がった。

この野郎っ。人が誰もいないと思ったから泣いてた時にっ!!

「や、やだな。ゆうとさんの泣き顔なんて見てないよ!」

「やっぱり居やがったな!!」

「どうどう」

ももの言葉に熱くなる俺を、あかが両手を上げて落ち着かせようとする。

だが、どうどうなんて、俺は牛じゃねえ!!

……怒っていても仕方ない。なんで、ももが願い事を叶えたか。つてことだ。

「はあ。まあいい。それよりも、お前あの時言ったよな?自分が消える前なら願い事を叶えるって。それがどうして消えた後に言ったことを叶えたんだ?」

「それは、小人が人間への手伝いをするから」

ももはそう言ってウィンク一つ。誤魔化してるのがバレバレだった一の。

じと目でしばらく見てみる。ももは乾いた笑いをした。

「あは、やっぱり駄目？……実はね、あの姿が消えるまでっていうのも神様との約束で。要するに、あかの名前を呼んだ記憶と一緒に消しちゃえば大丈夫かな」なんて」

あははと尚も笑うももに、あかさえもじと目で凝視していた。

「無茶するなよ。もも」

「大丈夫。神様忘れた。何も危険なし」

あかの言葉に答えたのは別の声。よく見ると、あかの後ろに白い小人がいた。

台詞からすると、この小人が記憶を消す魔法を持っているのだろう。

と、すれば。

「そうか。ありがとう、しろ」

「をい、あか。お前が来たのは、自分が生き返ったのを知らせに。つてわけじゃないな？」

記憶を消すのがあるってことは、そういうことだ。

最初の約束。三つ願いを叶えさせてくれ。そしたらあんたの記憶を消すことができる。

あかは頷き、神妙な顔付きで俺に言った。

「ああ。わかってると思うけど、ゆうと。あんたの三つの願いは全て叶えた。」

「わかってる。今度は俺の記憶を消すんだろ？」

俺はあかに笑いかけた。

あかは、額に皺を寄せ、俺に視線を返す。

「本当にいいのか？」

そんなすねた顔で、すねたこと言うなよ。躊躇っちまうだろ。

「いいさ。今なら後悔もない。全てが終わった今の、晴れ晴れとした気持ちのまま忘れられるなら、悪くねえ」

本当は、また一緒に遊びたい。

こんな良い思い出、忘れたくないかない。

けど、約束だ。

あかが頷いて、しろに指示を出した。

俺は自然に目を閉じる。

今度目を開けた時、俺は全て忘れているだろう。

それでいいんだ。

俺はうつすらと目を開けた。目の前にはさっきと同じ風景……。

「をい。なんで俺はまだ覚えてるんだ？」

記憶はなくなってなんかいない。あかやもとの出会いからはつきりと覚えている。

問いに、あかがにんまりと笑って答えた。

「そりやそうさ。違う魔法をかけたんだから。言っただろ？ 願い事を叶えたら一回だけその人間に魔法を使うことができる。って。それは、記憶を消す魔法じゃなくてもいいのさ。しろがゆつとにかけた魔法は」

そこで止めると、あかとももは顔を見合わせた。

笑顔がさらに明るくなり、俺に戻ってくる。

あかとももは、口を揃えてこう言った。

「僕（私）達を決して忘れない魔法。」

決して忘れない。

忘れなければ、名前なんか呼ばないだろ？

あかの口調は笑っていた。

俺も、笑った。

あか達が、俺と同じ気持ちだとわかったら、
嬉しかったから。

だから、ずっと一緒にいよう。

小人。彼等の名前は諸刃の剣。

知られてしまえば死ぬことにも成り得るが、それを乗り越えたなら……。

小人は幸せを、手に入れられるのだ。

完

赤い小人（8）（後書き）

中篇です。

この話はとりあえずメルヘンちっくだったな。なんて。

当初はあかと主人公以外出てこなかった予定だったんですが、いつの間にか増えてましたね（笑）

しかも、三つの願いというのも実は全然違う目的で使おうと思ってたり。

まあ、最初とはだいぶちがくなりましたが、今回はこのストーリーが一番だと思ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4217f/>

赤い小人

2010年10月28日08時24分発行